

---

# 土地分類基本調査

---

## 南部・富士宮・清水

5万分の1

国 土 調 査

山 梨 県

1990

# 序 文

本県では、新総合福祉計画に基づき県土のより高度な利用と保全等を目ざし昭和55年度「富士山」図幅をはじめとし、以来、12図幅の土地分類基本調査を行ってまいりました。

近年では、リニア実験線が山梨県において建設される事が決定される等高度な土地活用がされつつあり、本調査に対する関心もかなり高くなっております。

本年度は、「南部」「富士宮」「清水」図幅(国土地理院発行5万分の1地形図)のうち、山梨県の行政区域について、地形、表層地質、傾斜区分、水系、谷密度、土地利用現況を収録しております。また、成果の印刷については、コンピューター・マッピング方式を採用しております。

本調査の成果が、各種土地利用行政や土地開発事業の基礎資料として、広く利活用される事を希望いたします。

おわりに、本調査に御協力を頂いた関係各位に深く感謝いたします。

平成2年3月

山梨県農務部長

堀 越 孝 良

# 目 次

序 文	
まえがき	
総 論	
I 位置、行政区画および面積……………	1
II 人口および世帯数……………	4
III 地域の特性……………	6
IV 主要産業の概要……………	11
各 論	
I 地形分類図……………	15
II 表層地質図……………	23
III 土 壌 図……………	26
IV 傾斜区分図……………	29
V 水系・谷密度図……………	30
VI 土地利用現況図……………	31
資 料	
コンピューター・マッピングについて……………	32
土地分類基本調査における面積測定……………	33
について	

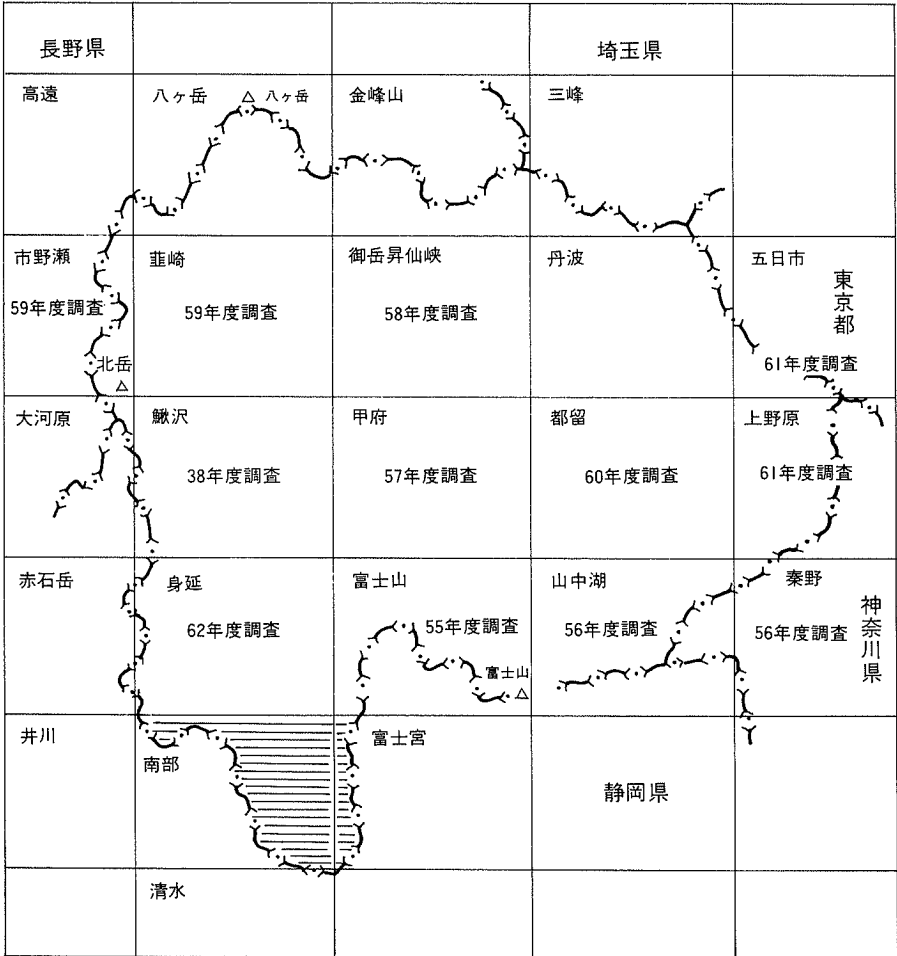
# ま え が き

1. 本調査は、国土調査法（昭和26年法律第180号）第5条第4号の規定により、国土調査の指定を受け、国土庁土地局国土調査課の指導の下に、山梨県が事業主体になり実施したものである。
2. 本調査の成果は、国土調査法施行令第2条第1項第4号の2の規定による土地分類基本調査図及び土地分類基本調査簿である。
3. 調査項目、成果の作成機関及び担当者は、下記のとおりである。

調 査 機 関	作 成 機 関	担 当 者
地形分類調査 標高・傾斜区分調査 水系・谷密度調査	山梨大学教育学部 東京都立大学理学部	教 授 吉村 稔 助 教 授 平川 一臣
表層地質調査	山梨学院大学 大月短期大学 山梨大学教育学部 宝石美術専門学校 山梨学院大学	教 授 浜野 一彦 " 田中 収 助 教 授 角田 謙朗 " 服部 清二 講 師 河西 秀夫
土 壤 調 査	山梨県総合農業試験場 " " 山梨県林業技術センター " " "	場 長 田中 正成 研究管理幹 日向 進 研 究 員 秋山 康三 所 長 有賀 武彦 主任研究員 馬場 勝馬 研 究 員 清藤 城宏 " 田中 格
土地利用現況調査	山梨県農務部農村整備課	副 主 査 鈴木 孝司 主 事 塩野 開
総 括	山梨県農務部農村整備課	課 長 松坂 雪春 主 査 木内 一郎 副 主 査 鈴木 孝司 主 事 塩野 開

# 総論

第1図 位置図



# I 位置，行政区画及び面積

## 1. 位置

「南部・富士宮・清水」図幅は、山梨県南部に位置しており、「南部」図幅は南西側に静岡県を、「富士宮」図幅は東側の大半を、「清水」図幅は北東側の一部を除いてそれぞれ静岡県を含んでいる。

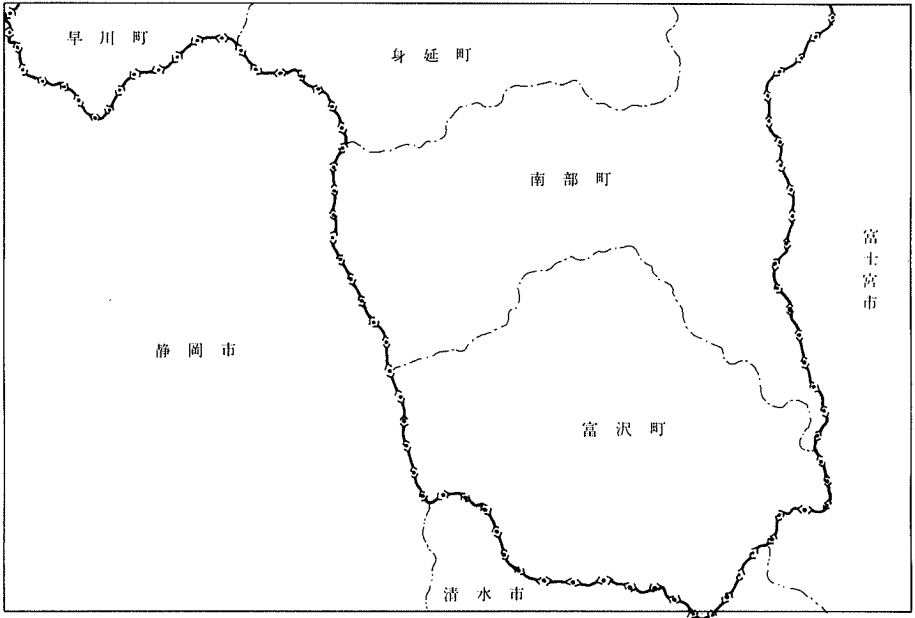
経緯度は、「南部」図幅東経 $138^{\circ}15'$ ～ $138^{\circ}30'$ ，北緯 $35^{\circ}10'$ ～ $35^{\circ}15'$ ，「富士宮」図幅東経 $138^{\circ}30'$ ～ $138^{\circ}45'$ ，北緯 $35^{\circ}10'$ ～ $35^{\circ}20'$ ，「清水」図幅東経 $138^{\circ}15'$ ～ $138^{\circ}30'$ ，北緯 $35^{\circ}$ ～ $35^{\circ}10'$ の範囲にある。

本年度の調査は「南部・富士宮・清水」図幅の内、山梨県の行政区域を対象とした。

## 2. 行政区画

「南部・富士宮・清水」図幅の行政区画は、第2図のとおりで早川町・身延町・南部町・富沢町の4町から成っている。

第2図 行政区画





### 3. 面 積

本調査対象区域内の市町村の行政区画面積及び図幅内面積は、第1表のとおりである。

第1表 面 積

市町村名	図幅内面積		市町村面積		占有率 A/B (%)
	面積(km <sup>2</sup> ) A	構成(%)	面積(km <sup>2</sup> ) B	構成(%)	
早川町	16.79	6.9	369.86	52.7	4.5
身延町	40.00	16.6	131.12	18.7	30.5
南部町	97.01	40.2	112.34	16.0	86.4
富沢町	87.73	36.3	88.29	12.6	99.4
計	241.53	100.0	701.61	100.0	34.4

資料：建設省国土地理院「昭和63年度全国都道府県市区町村別面積調」による。

但し、図幅内面積はコンピューター・マッピングによる面積測定の結果に基づいた数値である。

## II 人口及び世帯数

### 1. 人口

この地域は東を富士宮市、西を静岡市と接しているが、そのほとんどは山地であり、居住可能な地域は、富士川及び東西の山地から富士川へ至る支流の段丘面に限られており、それらの地域に集中している。

特に富士川沿いの地域では、右岸を国道52号線、左岸をJR身延線が走っており、主な行政機関や教育施設、文化施設等は富士川沿岸に存在している。山間部における人口密度は極端に低くなっており、集落が散在するのみである。

また身延町を除く3町は過疎化の傾向にあり、町では若年層の都市部への流出に歯止めをかけるべく企業の誘地等、雇用機会の増大を図っている。

### 2. 世帯数

人口の減少は、4町共通の問題となっていたが、身延町では近年徐々に増加する傾向にある。数字の上では、平均で世帯数が1減少するのに対し、人口は14人程度が減少する計算になり、この地域でも核家族化が進行するとともに、就学、就職による家族構成員の一部離村という形をとる傾向にあることがうかがえる。

第2表 人口および世帯数

市町村	昭和55年				昭和60年				増減			人口 伸び率 B/A	
	人口(男)	人口(女)	計(A)	世帯数	人口(男)	人口(女)	計(B)	世帯数	人口(男)	人口(女)	計		世帯数
早川町	1,409	1,596	3,005	1,088	1,229	1,422	2,651	1,061	-180	-174	-354	-27	0.88
身延町	4,790	5,017	9,807	2,696	4,597	4,811	9,408	2,703	-193	-206	-399	7	0.95
南部町	3,664	3,781	7,445	1,965	3,479	3,693	7,172	1,903	-185	-88	-273	-62	0.96
富沢町	2,440	2,580	5,020	1,269	2,351	2,436	4,787	1,261	-89	-144	-233	-8	0.95
計	12,303	12,974	25,277	7,018	11,656	12,362	24,018	6,928	-647	-612	-1,259	-90	0.95

### Ⅲ 地 域 の 特 性

本地域は県の最南端に位置し、東西を静岡県と接している。図幅の東側を富士川が南流しており、この富士川沿いの河岸段丘等のわずかな平地に住居等の生活の舞台が集中している。西部は十枚山、八紘嶺等の分水界で静岡市と接しており、これらの山地部は豊かな山林に覆われ林業が盛んに行われており、その経営管理は全国的に知られているところである。なだらかな山地斜面では、温暖な気候を反映して茶の栽培が盛んである。

また、本地域は静岡県と接しているため、古くから静岡市や富士宮市との経済的な結びつきが強く、就業、婚姻等の交流は山梨県の国中地方や峡南地方より深いものがある。

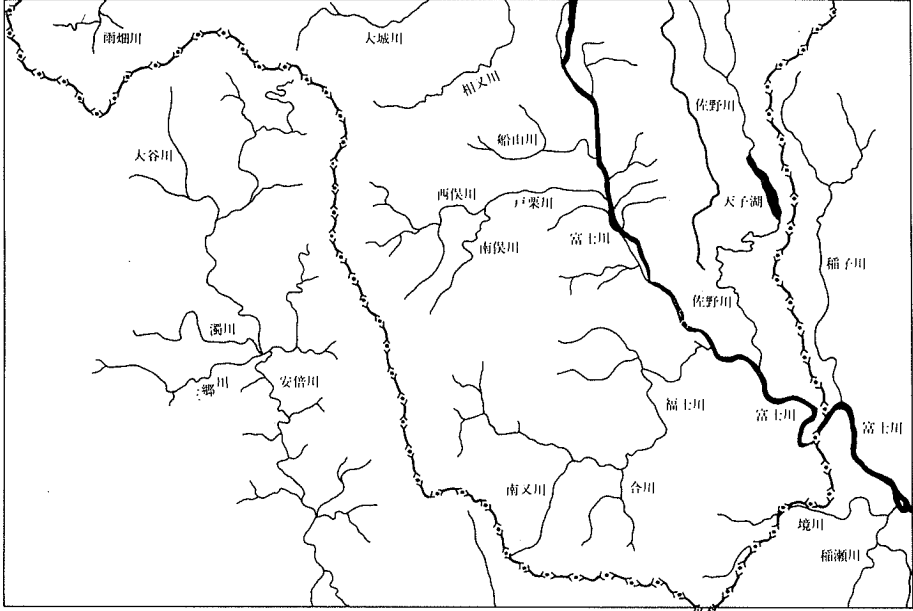
#### 1. 気 象

この地域では、温暖多雨の気候を呈し、平均気温は県下で最暖地域となっている。また、降水量も2,000mm～2,700mmに及び温暖海岸地方的気候に近くなっている。この気候を利用した、林業や茶の栽培が盛んに行われているところである。

第3表 甲府気候表（1951～1980年）

要素	単位	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	全年
平均気温	℃	1.8	3.3	7.1	13.0	17.3	21.1	24.8	25.7	21.6	15.4	9.7	4.0	13.7
最高気温(平均)	℃	8.3	9.9	13.8	19.6	23.9	26.5	30.0	31.4	26.9	21.2	16.2	10.9	19.9
最低気温(平均)	℃	-3.6	-2.2	1.3	7.5	11.7	16.9	21.3	21.8	17.9	10.9	4.4	-1.4	8.9
平均降水量	mm	40.4	46.2	71.4	89.0	96.8	146.7	133.0	127.3	146.7	111.7	51.1	32.5	1,092.8
平均風速	m/s	1.8	2.1	2.3	2.1	2.0	1.6	1.5	1.5	1.3	1.2	1.2	1.4	1.7
気圧(現地の値)	mb	981.7	982.3	981.8	982.6	979.9	977.5	977.5	978.5	981.1	984.8	986.0	984.2	981.5

第3図 主な屋根と河川図



## 2. 就業構造

この図幅内は、その大半が豊かな山林に覆われており、また、温暖多雨の気候を利用して、林業が盛んにおこなわれている。特殊林産物として、シイタケ、ナメコの栽培も盛んである。また林業から派生して、建築業に従事する者が多く、実に総就業者に占める割合は16%を上回っている。農業は、南部町、富沢町において茶の栽培が盛んであり「南部茶」「甲斐の緑」として有名である。

近年では、身延町や早川町において日蓮宗の総本山である身延山、南アルプスの登山口として観光開発に力が注がれており、図幅内の4町とも第3次産業、特にサービス業に従事する人口が急激に増加している。

また、南部町をはじめとして製造業への就業者数が多いのが特徴とされ捉えられる。

第4表 就業者数（昭和60年度国勢調査）

市 町 村	総 数 (人)	第1次産業		第2次産業		第3次産業		分類不可能産業	
		実 数 (人)	構成比 (%)	実 数 (人)	構成比 (%)	実 数 (人)	構成比 (%)	実 数 (人)	構成比 (%)
早 川 町	1,395	269	19.3	531	38.0	595	42.7	0	0
身 延 町	4,608	339	7.4	1,702	36.9	2,566	55.7	1	0.0
南 部 町	3,284	282	8.6	1,593	48.5	1,406	42.8	3	0.1
富 沢 町	2,466	429	17.4	1,118	45.3	919	37.3	0	0
計	11,753	1,319	11.2	4,944	42.1	5,486	46.7	4	0.0

### 3. 交 通

富士川左岸をＪＲ東海道線と、ＪＲ中央本線を結ぶＪＲ身延線が通じている。これと平行して、県道市川大門～芝川線が走る。また、富士川右岸を国道52号線が走り甲駿を結んでいる。また、富沢町万沢付近の富士川沿岸でＪＲ身延線、国道52号線及び県道は静岡県へ通じており、唯一県の南玄関としての交通上の要点として依存されている。

富士川は、ＪＲ身延線、国道52号線が開通するまでの間、山梨県と静岡県を結ぶ重要な交通手段として利用されており、明治時代までは水運が主な交通手段であった。

#### (南 部)

鉄 道 ① ＪＲ身延線

一 般 国 道 <1> 52号

主要地方道 ① 富士川・身延線

一般地方道 1. 釜の口・塩沢線                      2. 内船（停）線  
3. 井出（停）線                                  4. 高瀬・富沢線  
5. 大向・富沢線                                  6. 日向宿線

#### (富士宮)

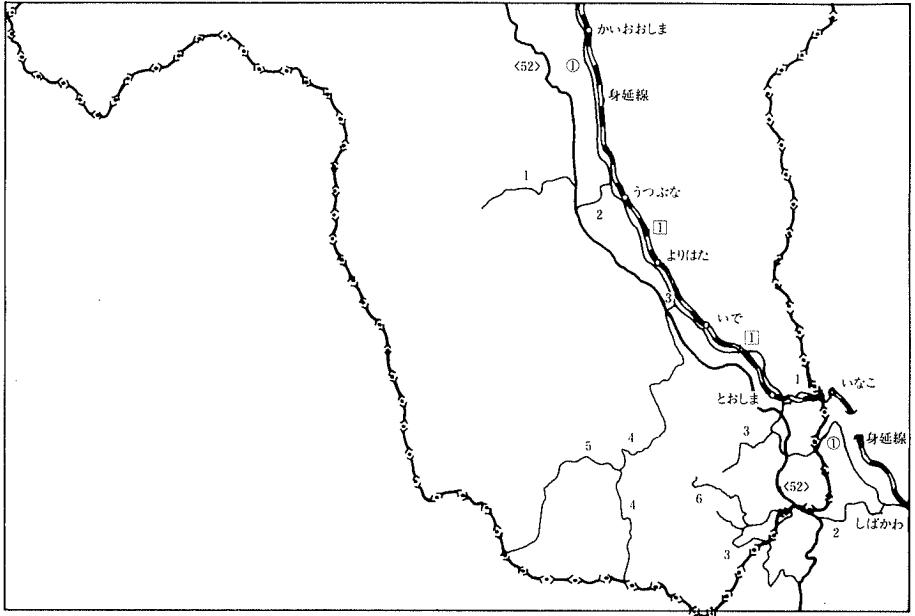
鉄 道 ① ＪＲ身延線

一 般 国 道 <1> 52号

主要地方道 ① 富士川・身延線

一般地方道 1. 十島・芝川線                                  2. 穴原・塩出線  
3. 日向宿線

第4図 交通網図





## IV 主要産業の概要

### 1. 林業

富沢町や南部町の地域では、年間降雨量が約2,000mm～2,700mmにおよび、年平均気温も12～15℃と林業に適した温暖多雨の気候である。

この気候を利用して、スギやヒノキの栽培が盛んである。また林業の歴史は古く、戦国時代、穴山氏の植林奨励文書を始め、明治時代以降は、町村による林業発展の諸政策が強力に推進され、近年では、その経営管理は全国的に高く評価されている。しかし、近年、後継者不足や木材の価格低迷、経済的需要の低下等を反映して労働力が不足しており、これに伴って生産額も伸び悩んでいる。

林産物としては、南部町のクリ、富沢町のタケノコが有名である。

### 2. 農業

この地域では、富士川沿いのわずかな平地部分を利用して、主に水田等が営まれているが、耕地率は4町平均で1.3%と極端に狭少なため、兼業農家の割合が高く、兼業率は87%を上回っている。また、水田に関しては自給的なもので、近年では換金作物としてシイタケや茶の栽培が行われ、特に茶に関しては「やぶきた」等の品種を導入し県内外に出荷されている。

### 3. 観光業

標高1,000m～2,000mに及ぶ東西の山岳地帯から、富士川沿岸に至る地域を緑したたる樹林に覆われた峰々に抱かれ、その間を多くの清冽な谷川が巡り流れる。この自然美を利用したハイキングコースである東海自然歩道が図幅を天子ヶ岳から徳間峠まで連なっている。まさに観光、休養、心身の練成の場として好適な条件に恵まれた当該地域では、就業者数における第三次産業の占める割合が次第に高くなってきている。

町では、この自然を生かした観光資源の開発の為、地域小規模事業活性化推進事業等により特産品のPR、観光開発に重点を置き、自然との調和のとれた観光業の発展を期している。

第5表 農家戸数及び耕地面積

区分 市町村名	農家戸数(戸)			耕地面積(ha)				耕地率 (%)	林野面積 (ha)	
	専業	兼業 合計	兼業率	田	普通畑	樹園地	牧草地			計
早川町	144	366	71.8	28	38	45	—	111	0.3	36,005
身延町	122	987	89.0	155	50	51	—	256	2.0	10,725
南部町	72	773	91.5	135	25	92	—	252	2.2	9,790
富沢町	70	740	91.4	109	38	149	—	296	3.4	7,768
計	408	2,866	87.5	427	151	337	—	915	1.3	64,288

資料：山梨県農林水産統計年報(昭和63年度版)

第6表 農業粗生産額

単位：百万円

区分 市町村名	農 粗 生 産 額		耕						種				畜					産		農加 産 物 工
	計	米	麦 雜穀 豆類	いも類 及び 野菜	果実 花き	その他	養蚕	計	肉用牛	乳用牛	豚	鶏	その他	計	肉用牛	乳用牛	豚	鶏	その他	
早川町	396	16	6	42	15	19	6	290	—	—	283	—	7	2	—	—	—	—	—	
身延町	388	145	12	56	16	32	23	101	—	3	5	93	—	3	—	—	—	—	—	
南部町	426	128	9	56	13	142	7	66	—	—	11	55	—	5	—	—	—	—	—	
富沢町	477	103	6	116	16	162	20	48	—	35	13	0	—	6	—	—	—	—	—	
計	1,687	392	33	270	60	355	56	505	—	38	312	148	7	16	—	—	—	—	—	

資料：山梨県農林水産統計年報（昭和63年度版）

第7表 工業統計及び商業統計

単位：人、百万円

区 分 市町村名	事業所数	従業者数	製造品出荷額	商店数	従業員数	年間販売額
早川町	3	55	15,303	44	75	39,649
身延町	27	638	979,931	238	606	760,599
南 部 町	40	994	2,479,618	114	352	351,433
富 沢 町	22	298	188,552	102	220	236,727
計	92	1,985	3,663,404	498	1,253	1,388,408

資料：山梨県統計年鑑（昭和63年度版）

（注）「事業所数」・「従業員数」・「製造品出荷額」は4人以上の事業所である。

# 各論

# I 地形分類図

## 1. 地形概説

調査図幅地域の地形は、大別すれば、赤石山地、天子山地および、両山地を分ける富士川河谷から成る。

赤石山地の主稜線は、南北方向を示すものが大半であるが、安倍川・雨畑川・春木川源流部をなす県境稜線は東西方向である。この東西方向の主稜線から北へ分岐しているのが、七面山および身延山へ続く南北方向の主要な支稜線である。県境主稜線は安倍峠付近から南方へ再び南北方向となる。この稜線より西側斜面は安倍川流域に属する。主稜線の高度は一般に1500m～1900mで、図幅内の最高所は、山伏山の2014mとあまり高くない。

赤石山地の東側斜面をなす山地は富士川本流に向って全体として高度が下がり400m以下の丘陵性山地の範囲もかなり広い。

赤石山地は主として古第三系・瀬戸川層群（図幅の北西端の一部には、さらに下位の三倉層群および白亜系・小仏層）および新第三系上部の富士川層群から成る。両者の境界が糸魚川・静岡構造線である。糸魚川・静岡構造線は春木川の源頭から県境稜線を、十枚山付近で斜断し、安倍川河谷側斜面に出る。したがって、この構造線を直接反映した地形は、少なくとも図幅内では、発達しない。十枚山から南方の県境稜線付近は、新第三系下部の楡形山累層から成る。楡形山層は南部町の御殿山周辺にも局所的に分布し、赤石山地、天子山地の隆起、糸魚川・静岡線の活動にともなって変位してきたことを示す。

富士川河谷東側の天子山地は、最高峰の毛無山（1946m）から南へ続く県境主稜線と、佐野川河谷を隔てて、西側の思親山（1031m）を最高所とする南北方向の稜線を主体とする。山地は富士川層群下部と、それらへの貫入岩類から成り、後者は県境稜線の西側斜面を構成する。

富士川河谷は、谷底部が狭く、流域の山地での土砂生産量が多いために、谷底部はほぼ全域が河床であるともいえる。谷底平野はむしろ、支流沿いに分布する。

河川は、南～南東に流下する富士川に対して、赤石山地側の支流は、山地斜面の一般的な勾配に従って、概して東へ流下して、富士川に合流する。天子山地内

の佐野川河谷は、前述のように、主稜線と同様に南北方向を示す。

山地斜面は急勾配で、30°以上の範囲が圧的に広いが、富士川本流沿いでは、20°～30°の勾配の斜面がかなり広がる。40°以上の、とくに勾配が大きい斜面は糸魚川・静岡構造線より西側に広く分布し、この点については、地形的な特徴の境界が構造線によって与えられていると言えよう。

調査図幅内の水系はすべて富士川水系に含まれる。赤石山地の県境稜線は、大井川、安部川、興津川流域との分水界になっている。

## 2. 地 形 区

空中写真判読と野外調査結果に基づき、地形分類図を作成した。地形の連続性、不連続性、起伏の程度、地形を作る物質の特徴、形成に関与した作用を総合すると、地域的なまとまりを持つ地形地域を設定することができる。表に示すように、大きく山地と低地・台地に分けられる。低地と台地をまとめたのは、いずれも分布が狭く、断片的であるためである。次項を細分し(a, b, c)、さらにa, b, c項をそれぞれ1. 谷底平野, 2. 段丘に分けた。この第三項は、たとえば、IIの1富士川本流平野, IIの2富士川平野のように地域別に分けてもよい。

地形地域区分

I 山 地	a. 赤 石 山 地	1. 策 ケ 岳 山 地 2. 七 面 山 山 地 3. 十 枚 山 山 地 4. 貫 ケ 岳 山 地
	b. 天 子 山 地	
II 低 地 台 地	a. 富 士 川 河 谷 平 野	1. 谷 底 平 野 2. 段 丘
	b. 赤石山地河谷平野	1. 谷 底 平 野 2. 段 丘
	c. 天子山地河谷平野	1. 谷 底 平 野 2. 段 丘

### 3. 地形詳説

#### I. 山地

山地地形の図上表現は斜面勾配の分級区分に基づいた。それらは、15°未満、15°～30°、30°～40°、40°以上の4段階である。図上では、色の濃淡により、色(茶)の濃い方が急勾配斜面である。この表現方法を山地斜面分類の基本とし、さらに、山頂、山稜、山腹の平坦面および顕著な凸・凹型緩斜面を重ねて表現した。さらに赤石山地は崩壊地形が顕著で、それらは山地地形の発達や防災の点でも意味が大きいため、規模および成因(崩落性か地すべり性か)によって分類表示し、崩落物質の堆積(あるいは移動)地形についても山地斜面上に重ねて表わした。以上のような山地斜面の分類は、山地斜面を構成する様々な地形現象と斜面勾配との間の相関関係を議論する資料となり得る。

山地の地域区分は、まず赤石山地(Ia)と天子山地(Ib)に分けられる。赤石山地は、雨畑川より西の策ヶ岳山地(Ia1)、雨畑川と春木川～身延川・大城川上流部・安倍峠を通る糸魚川・静岡構造線間の七面山山地(Ia2)、それより東側の十枚山山地(Ia3)さらに、富士川上流部～樽峠より富士川河谷側の貫ヶ岳、白鳥山を含む貫ヶ岳山地(Ia4)に区分できる。十枚山山地(Ia3)は、北隣の身延・赤石岳図幅で身延山山地として区分した地形地域の南方への連続である。この山地地域も身延川上流河谷～安倍峠で区切り、十枚山山地と分けることも可能であろうが、そう区分することの積極的な意味はない。

天子山地は、細分していない。やはり身延・赤石岳図幅との連続性のためであるが、佐野川の河谷によって区分することはできる。

#### Ia. 赤石山地

策ヶ岳山地(Ia1)は、大井川および安倍川水系との分水界より東側および北側斜面にあたり、雨畑川源流部をなす。山地斜面は急勾配で40°以上の斜面は全体の40%前後、30°以上では、90%以上にもなる。大井川との分水界をなす主稜線付近では、ほとんど稜線にまで崩壊が進行している。

七面山山地(Ia2)は、七面山から南に延びる稜線と河谷斜面から成り、東側の境界は、糸魚川・静岡構造線にあたる春木川の上流から安倍峠である。したがって、地質は古第三系・瀬戸川層群より成り、西側の策ヶ岳山地と一連である。



山地斜面は $30^{\circ} \sim 40^{\circ}$ 以上の勾配が大半を占めるが、稜線部に限ってやや緩勾配の斜面が比較的広い。八紘嶺近くの稜線には重力性断層によると思われる二重山稜（線状凹地）が分布する。なお、主稜線の南側斜面、安倍川源頭部には大谷崩で顕名な巨大崩壊地が主稜線にまで達しているほか、多くの崩壊性山地斜面の発達著しい。

十枚山山地（Ia3）は身延山地（身延・赤石岳図幅）の南縁をわずかに含むものの、主として、安倍川との分水界をなす主稜線より東側の山地である。主稜線部のうち十枚山より北は糸魚川・静岡構造線の西側の古第三系、南は新第三系の橈形山累層より成る。この古第三系および新第三系橈形山累層から成る山地斜面は、その東側の山地に比べて、とくに $40^{\circ}$ 以上の急斜面の分布範囲がかなり広い。一方、さらに東側の山地斜面は全体としては $30^{\circ} \sim 40^{\circ}$ の急斜面が広いが、 $40^{\circ}$ 以上の極急斜面の分布がはっきりと少なくなる反面、富士川に沿って $30^{\circ}$ 以下の勾配の斜面がまとまって分布するようになる。

十枚山山地には大小の山地崩壊が各所に分布する。これらのなかには顕著な崩落崖と崩落物質の堆積地形を残すものがある。十枚山南方にある山頂部に近い広大な平坦部・月夜の段は、主稜線から崩落した堆積物から成る。また富士川沿いの丘陵性の山地は平坦な尾根と緩い凹形の緩斜面の組み合わせから成る範囲も広い。さらに、この不規則な山地斜面の地形の大半は地すべりおよび地すべり性崩壊によるもので、山間の古い集落の多くはそこに立地している。相対的に大きな山地崩壊は篠の井山の東斜面に分布する。

このような崩壊、地すべりは土石流を発生させたらしく、谷底、支谷の出口などに土石流の堆積地形（場所によって埋谷地形の場合と沖積錐の地形の場合がある）が分布する。それらは、すでに段丘化しているものと新鮮なものが明瞭に区別される。

貫ヶ岳山地（Ia4）は $30^{\circ}$ 以下の斜面の範囲が広くなり、とくに白鳥山付近では、 $15^{\circ}$ 前後の斜面も広く分布するようになる。しかし、地すべりおよび地すべり性崩壊が山地斜面で支配的に作用してきたという点においては、前記山地と同様である。白鳥山は頂上の四周を崩壊地形によって囲まれている。このうち、県境稜線にあたる北西側の広い平坦面から成る稜線緩斜面は地すべり性の崩落物質

であり、山頂付近には極めて新鮮な崩落崖が形成されている。白鳥山の崩壊は巨大地震時に富士川本流をせき止め、二次災害をひき起こしたとされるが、古文書等による検証、崩壊地形から導かれる崩壊土砂量の概算およびそれに基づく災害危険図の作成が望まれる。

#### I b. 天子山地

天子山地は、富士川層群下部とそれを貫く石英閃緑岩、玢岩類から成る。山地斜面にはこれらの地質のちがいは直接には反映されておらず、全体として、 $30^{\circ} \sim 40^{\circ}$ の勾配が支配的な急斜面が広い。しかし、赤石山地の高所（筑ヶ岳山地や七面山山地）に比べると、稜線部でのやや緩勾配な斜面（ $20^{\circ}$ 前後）の発達が良い。赤石山地と最も大きく異なるのは、山地崩壊、とくに小規模な崩壊の分布が極端に少ないことである。しかし、これは、天子山地では土砂の生産・移動（山地崩壊・土石流）が生じていないことを意味するわけではない。すなわち、天子山地から富士川本流河谷へ出る小さな支流の多くは土石流の堆積地形（しかも大半は段丘化しておらず、新しい）を形成していることに注意すべきである。

### II. 低地・台地

低地の地形については、単位地形による分類に、地表面勾配を黒の細線模様で重ねて示すことを原則としている。勾配の分級は $15^{\circ}$ 以下の範囲について、 $8^{\circ}$ 、 $3^{\circ}$ 、 $\frac{1}{2}^{\circ}$ 、 $\frac{1}{4}^{\circ}$ を境界値としている。 $\frac{1}{4}^{\circ}$ は2万5千分の1地形図の2.5mないし1.25mに基づくことが望ましい。本図幅地域は緩勾配な地域が狭いこともあって、2.5mの等高線はわずかししか分布しない。それに基づく限り、 $\frac{1}{2}^{\circ}$ より緩い勾配の地形がまとまって分布することはない。

本図幅地域には、まとまった広がりを持つ低地は分布しない。台地・段丘地形も、連続性が悪く、台地と低地をそれぞれ独立した地形地域区分するほどの発達を示さない。低地・台地を一括した地形地域としたのは、このためである。

本図幅の低地・台地は、富士川河谷平野（II a）、赤石山地河谷平野（II b）、天子山地河谷平野（II c）に地形地域区分できる。

#### II a. 富士川河谷平野

富士川本流に沿って、極めて小規模な沖積平野が分布する。たとえば、甲斐大

島付近、内船付近などであるが、これらは、いずれも人工的に堤防に守られて耕作地になっているにすぎない。すなわち、富士川本流に沿う谷底部は、すべて富士川の河床であって、現在の河床と同様に、河道（流路）と砂礫堆から成る地形であるとも言える。分類図では、堤防に保護されている範囲について谷底平野（IIa1）とした。

段丘地形（IIa2）の発達もあまり顕著ではないが、南部町付近、富沢町・横沢付近に比較的まとまって発達する。富沢町の段丘上に位置する天神堂遺跡は山梨県の縄文時代の重要な遺跡の1つである。富士川本流沿いには、図示した段丘のほか、段丘状の地形が分布する。それらは高度が様々であり、かつ連続性が悪く、大半は地すべりに伴う緩傾斜化した地形と判断される。

#### IIb. 赤石山地河谷平野

相対的に連続性のよい、まとまった谷底平野はむしろ、赤石山地の河川、すなわち富士川の支流沿いの、しかも富士川本流との合流点近くに分布する。たとえば、南部で合流する戸栗川、その南の富士川の低地が顕著である。これらは、支流河川に比べて本流の富士川が大きく、合流点付近で一種のせき止め作用が働いて、支流は堆積性の谷底平野を発達させると思われる。

段丘地形（IIb2）も戸栗川の一部を除いてほとんど発達しない。

#### IIc. 天子山地河谷平野

天子山地でも低地（IIc1）はほとんど発達せず、わずかに、佐野川の最下流部および天子湖の上流側の狭い範囲に分布するにすぎない。これらは谷底平野というより、最近の比較的長期間、洪水を受けていない河床というべきかもしれない。

## 4. 起伏量

5万分の1地形図「南部」、「富士宮」、「清水」図幅の山梨県内について、図幅の各辺を20等分して得られるすべてのメッシュ内の最高点と最低点の標高差を求め、これを起伏量とする。これらの値を、50m以下、50～100m、100～200m、200～400m、400m以上の5段階に分級し、起伏量の小さい方からそれぞれ1、2、3、4、5の数字で表現して起伏量図とした。

起伏量は単位面積あたりの地形の急峻を、あるいはなだらかさを表現する。図

幅全体を概観すると、i) 赤石山地および天子山地の主稜線部では400m以上の範囲がほとんどであること、ii) 赤石山地では、富士川の河谷へ向って400m～200m、200～100mと、かなり系統的起伏量が漸減すること、iii) しかし、200～100mの範囲は連続的ではなく、主要な支流沿いに、あるていどまとまった範囲をなしていること、iv) 天子山地では、200m以下の小起伏の範囲はほとんどなく、谷が深く切れ込んでいること、v) 起伏量100m以下の範囲は、わずかに1メッシュしか認められず、まとまった(1メッシュ以上の面積の広がりをもつ)平地は分布しないこと、などを特徴としてあげることができる。

これらのうち、ii), iii), iv) の点にかかわる、赤石山地と天子山地の起伏量については、地質ではなく、主稜線から富士川本流までの距離およびその高度差を反映していると考えられる。この高度差は、両山地の地殻運動のちがいが、それに関連する侵食過程のちがいなどが集積した結果とみなせる。

赤石山地主稜線近くで、一段階小さな起伏量を示す所(たとえば、十枚山山地の月夜の段)は、山地斜面崩落物質堆積地域にあたることもあり、大規模な山地崩壊の所産である。あるいは、興津川の流域への峠である田代峠周辺にも認められる。ここは、糸魚川・静岡構造線に沿う直線的な浅い谷地形が発達し、地質構造の制約を受けていることを示す。

(平川一臣)

南部・富士宮 起伏量 図

	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	r	s	t	u	v	w	x
A	5	5	5	5	5	5	5	5	5	4	5	5	4	4	4	4	4	5	5	4	5	5	5	5
B	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	4	4	4	4	5	5	4	4	5	4	
C	5	5	5	5	5		5	5	5	5	5	5	4	4	4	4	5	5	5	5	4	4		
D		5	5							4	5	4	5	4	5	4	3	5	5	5	4	5		
E										5	5	5	5	5	4	3	3	4	4	4	5	4		
F										5	5	5	5	4	3	2	3	4	5	5	5	4		
G										5	5	5	5	4	3	3	2	3	4	5	5	4		
H										5	5	4	4	4	4	4	3	3	5	5	5	4		
I										5	5	5	5	4	4	4	4	3	4	4	5	5		
J										5	5	5	5	5	5	4	4	4	4	4	5	5		
K										5	5	5	5	4	5	4	3	3	4	4	4	4	4	
L										5	4	5	5	5	4	3	2	2	4	4	4	4		
M										5	4	4	5	5	4	4	4	3	4	4	4	4		
N										5	5	4	5	4	4	4	3	4	4	3	3	4		
O										5	5	5	5	4	4	4	4	4	4	3	3	4		
P										5	5	4	5	5	4	5	5	4	3	3	4			
Q										5	4	5	5	5	4	4	5	4	4	4	4			
R																5	5	4	4	4	5	3	4	
S																5	5	5	4	4	5	4		
T																		4	5	5	4			
U																								

1 : <50m

2 : 50~100m

3 : 100~200m

4 : 200~400m

5 : >400m

## II 表層地質図

本図幅の中央部には富士川が位置し、南流する。各山地は富士川に平行して南北に連なり、地形的にも、地質的にも南北の方向性を示している。

富士川をはさんで西側には巨摩山地その西側には赤石山地・東側には天子山地があって、いずれも南北の山嶺が連なり、とくに西側では、西縁の標高2,000m内外の赤石山地の山嶺とそれに接する標高1,000m～2,000mの巨摩山地が階段状に並んで富士川に面している。

富士川東側には天子山地の山嶺が連なり、その標高は1,000m～1,200mで巨摩山地と略同様の標高を示している。

主要山嶺は赤石山地では山伏（標高2,013m）巨摩山地では十枚山（標高1,632m）篠井山（標高1,394m）等である。

天子山地では天子ヶ岳（標高1,220m）白水山（標高811m）等である。

河川は主要河川は富士川であるが、これに合流する支流は西側では巨摩山地に源流をもって東流又は東北流して富士川に注ぐ河川は北から大城川・西俣川・福士川である。東側では天子山地に源流をもち、南流して富士川に注ぐ、佐野川である。

地形と地質との関係では、赤石山地では先新第三紀層より構成され、NSの走行を示し、NS軸のしゅう曲軸をもって勾斜、背斜をくりかえす。その東側はNS走行をもつ糸魚川・静岡構造線によって新第三紀層と接している。新第三紀層も先新第三紀層と同様のNS軸のしゅう曲をくりかえしている。

### I 未固結堆積物

富士川および各支流の河床に礫層を主とする河床堆積物がみられる。富士川の河床巾は最大200mにも達し、礫層の厚さは50mを超えることがある。各支流ではれき層の厚さは20mが最大である。

各支流と富士川との合流点には扇状地堆積物がみられるが、その規模は小さい。

### II 半固結堆積物

#### II-1 ローム層

各山地の山頂にはローム層の堆積がみられる。層厚は2～3 mである。

## II-2 洪積層

富士川に沿って半固結礫層がみられる。礫種は先新第三紀層の珪岩・泥岩・砂岩を主とする。この他に新第三紀の凝灰岩・泥岩・砂岩・花崗岩類を少量に伴っている。

## III 固結岩類

図幅の西部赤石山地には先新第三紀四万十層群が、富士川沿岸の巨摩山地、天子山地には新第三紀御坂層群が露出する。しかし御坂層群の上部層（石英安山岩質溶岩・同質火山礫層岩）は本図幅内では欠除している。

その層序は次のとおりである。

第 四 紀	洪 積 層	礫 層
新 第 三 紀 鮮 新 世	富士川層群	礫 岩 安山岩質溶岩流凝灰岩
新 第 三 紀 中 新 世	御 坂 層 群	中部 砂岩・泥岩・互層
		下部 玄武岩質緑色凝灰岩 変朽安山岩
先新第三紀	四万十層群	千枚岩・珪質粘板岩
		千枚岩・硬砂岩
		硬砂岩・珪岩・輝緑凝灰岩

## IV 貫入岩類

深成岩は図幅東部の天子山地の背梁に沿って石英閃緑岩が露出し、その貫入方向は南北を示している。貫入期は新第三紀末である。脈岩は含クロム透輝石粗粒玄武岩で、御坂層群中部層下部層を貫き、時に複合岩脈となっている。

## V 地下水

地下水は現河川の河床底を流れる伏流水と洪積層中の地下水層とがある。富士川の伏流水は河床中を広く河床礫層も厚く豊富な地下水が存在する。

洪積層地下水は洪積層中および洪積層下底の基盤との不整合面に地下水層がみられる。下底地下水層の地下水量は豊富である。

## VI 温 泉

南部町谷伸，南部町西俣川，南部町佐野川，富沢町万沢に温泉が湧出するがいずれも御坂層群中より湧出しており，泉温は35℃以下である。

## VII 災 害

富士川沿岸には地すべり地帯が多いが、本図幅内では身延町と南部町との境界近くの横根中ではこれまでにしばしば地すべりが発生している。

断層の活動に伴う構造性地すべりである。

## VIII 資 源

佐野川上流の上佐野付近に露出する粗粒玄武岩にクローム透輝石の深緑色の白形結晶が斑晶としてみられ，結晶の大きさは1.5cm×1.5cm×1.0cmにも及び，加工により貴石として利用されるものもある。

身延町光子沢にはジャスパー（鉄石英）が玄武岩質凝灰岩中に脈状となって産出し，加工により半貴石として利用可能のものである。

（浜野一彦）

## 参考文献

- 浜野一彦他（1970）：山梨県地質誌 山梨県  
浜野一彦他（1972）：山梨県土地分類調査20万分の1 山梨県  
浜野一彦（1974）：甲府構造線および富士八ヶ岳構造線 山梨大学教育学部紀要  
浜野一彦他（1981）：土地分類基本調査(富士山) 山梨県  
浜野一彦他（1988）：土地分類基本調査(身延) 山梨県



## Ⅲ 土 壤 図

### 耕地の土壤

本地域に分布する土壤は、褐色森林土、灰色低地土が広く分布し、僅かに黒ボク土および黄色土が分布している。

分布する土壤の特徴は次のとおりである。

#### 1. 黒ボク土壤

この土壤は、黒色ないし黒褐色（土色の明度・彩度とも2以下）の腐植に富む火山灰土層（黒ボク層）で厚さは25cm以上50cm未満、その下層は腐植の少ない褐色の火山灰土である。これに属する大川口統は、表層が腐植質火山灰土からなり、その厚さは30cm程度であり、土性はおおむね粘質である。一部には、20～25cm程度の浅い多腐植層からなるものも包含されている。本図幅内では、万沢、向島地内の台地に少面積分布し、主に普通畑として利用されている。

#### 2. 褐色森林土壤

この土壤は火山性重粘土が主で、全層の腐植含量が少なく、粘性、可塑性の強い土壤である。これに属する土壤統は、岳辺田統、小坂統および小向統がある。これらは主に、山間の傾斜地および台地に分布する。岳辺田統は、全層に角礫が富み、山間の急傾斜面に分布し、主に茶園等に利用されている。小坂統は礫含量が少なく、山間の比較的緩斜面に分布し、茶園、普通畑等に利用されている。小向統は山間台地に分布し土層内に礫が存在し、水田として利用されている。

#### 3. 黄色土壤

全層の腐植含量は少なく下層土の色が黄～黄褐色を呈し、土性は主に強粘質で礫を含まない。水田利用によるかんがい水の影響による斑紋が認められる。これに属する蓼沼統は腐植含量が少なく全層強粘質である。本図幅内では、富士川右岸の比較的平坦地に分布し、水田としての利用が多い。

#### 4. 灰色低地土壤

河成沖積低地に分布し、全層の腐植含量が少なく、土性は壤～砂質であり、下層土の色が主に灰～灰褐色を示す土壤である。これに属する土壤統は、追子野木統、登戸統がある。追子野木統は表層の50cm内外は壤質で下層は砂礫層土である。表層には水の影響による斑紋を有する。本図幅内では、富士川および富士川支流の西俣川、福士川等の沿岸周辺に分布し、主に水田として利用されている。登戸統は斑紋がない土壤であり、富士川の両岸に僅かに分布し、主に普通畑として利用されている。

(秋山康三)

#### 山地及び丘陵地の土壤

##### 1. 黒ボク土壤

A層は黒色ないし黒褐色の腐植に富んだ火山灰であり、厚さは25～50cm堆積している。B層は腐植が少なく、A層とB層の境は割合はっきりしている。これに属する土壤統は身延1統と富沢1統で、分布は山頂の凹地形のところのみられ、面積は小面積である。主にヒノキ、スギ人工林として利用されている。

##### 2. 乾性褐色森林土壤

褐色森林土壤の乾燥型で、いわゆるB<sub>A</sub>、B<sub>B</sub>、B<sub>C</sub>型に相当する土壤であり、A<sub>0</sub>層はF層が目立つ、A層は黒褐色～暗褐色で、B層との境は比較的是っきりしている。土壤中にしばしば菌糸がみられる。これに属する土壤統としては身延2、南部1、富沢2、早川1の各統で、分布域としては尾根筋から山腹上部である。主として天然広葉樹林及び、ヒノキ、スギ、アカマツの人工林として利用されている。

##### 3. 褐色森林土壤

褐色森林土壤の適潤型でB<sub>D</sub>(d)、B<sub>D</sub>型に相当する土壤である。A<sub>0</sub>層はL層がまれにあるだけで、F、H層はみられない。A層は黒褐色で腐植に富み層位も厚く、団粒状構造がよく発達している。B層との境は漸変である。これに属する土壤統は身延3、南部2、富沢3、早川2の各統であり、山腹中部から山脚部にか

けて広範囲に分布している。主として、スギ、ヒノキの人工林として利用されている。

#### 4. 湿性褐色森林土壌

褐色森林土壌の湿性型でB<sub>E</sub>、B<sub>F</sub>に相当する土壌である。A<sub>0</sub>層はなく、A層は腐植に富み層位が厚いが、やや水分が多い。B層との境は判然としない。これに属する土壌統としては身延4、南部3、富沢3、早川3の各統で、沢沿いに帯状に分布しており、主としてスギ人工林として利用されている。

#### 5. 乾性ポドゾル化土壌

ポドゾル化土壌のうち、P<sub>D1-III</sub>型に相当する土壌で、A<sub>0</sub>層はきわめて厚く、とくにF-H層がよく発達している。A層は少なく、B層に鉄分の集積層がしばしばみられる。これに属する土壌統としては早川4統である。分布域は赤石山地の主稜線上に帯状にみられる。主として天然針・広混交林が生育している。

#### 6. 湿性ポドゾル化土壌

ポドゾル化土壌のうちP<sub>w(h)1-III</sub>型に相当する土壌である。A<sub>0</sub>層はH層がよく発達していて厚い。腐植の集積がはっきりしており、土壌の断面は暗い。これに属する土壌統は早川5統で、赤石山地の山頂平坦部及び山腹上部の緩斜面に分布している。主として天然針・広混交林が生育している。

(馬場勝馬)

## IV 傾斜区分図

5万分の1地形図「南部」,「富士宮」,「清水」図幅の山梨県地域について,すべての等高線間隔に基づいて,地表面の傾斜を図上で測定し,分類した。分級は,40°以上,40°~30°,30°~20°,20°~15°,15°~8°,8°~3°,3°以下である。山地斜面以外の,3°より緩傾斜な地形については,2万5千分の1地形図の等高線により,3°~ $\frac{1}{2}$ °, $\frac{1}{2}$ °~ $\frac{1}{4}$ °, $\frac{1}{4}$ °以下の細分を行ない,地形分類図上に別途に表現する方法をとった。ただし,本図幅内では $\frac{1}{2}$ °以下の範囲は,少なくとも地形図上作業によってまとまって得られることはない。

山地斜面の傾斜分布は, i) 40°以上および,30°~40°の急斜面を主体とする筑ヶ岳山地,七面山山地,および十枚山山地の県境稜線部付近, ii) 30°~40°の急斜面が支配的で,40°以上の急斜面は点在し,かつ20°~30°の斜面が広く現われる十枚山山地の大半および,天子山地, iii) 20°~30°および20°以下の斜面の占める範囲が広く,40°以上の斜面はそれらの間に点在する富士川本流沿いの十枚山山地および貫ヶ岳山地,以上の三地域に大別することができる。

これらのうち, i)~ii)の山地内において20°~30°,場所によっては3°~8°ないし8°~15°というかなり緩勾配の斜面が出現する所は,前者は,斜面脚部や谷中の埋積(土石流による)地形面,後者は巨大な崩落物質堆積面に一致することが多い。一方, iii)の富士川本流沿いにおいて,3°~8°あるいは,さらに緩勾配を示すことがあるのは,ほぼ段丘面に限られる。

富士川本流の河床および谷底平野はほぼすべて,3°以下の勾配である。3°以下の勾配の範囲は,主な支流である戸栗川,福士川,身延川支流の相又川などに限られる。

(平川一臣,吉村 稔)

## V 水系・谷密度

5万分の1地形図「南部」,「富士宮」,「清水」図幅の各辺を40等分して得られるメッシュの区画線を切る,すべての谷線数の4メッシュごとの和を谷密度とする。水系図は,そのため基礎資料であり,上記地形図幅上の水流および等高線から判読されるすべて谷線を示したものである。なお,横座標のtとuの間が「南部」と「富士宮」図幅境界に相当する。

水系パターンには特に注目すべき現象はない。地質のちがいはほとんど有意な相違をもたらさない。赤石山地では,南北方向および直交する東西方向の谷が,比較的目につき,そこからより低次の谷が分岐しているようにみえる。おそらく,南北方向は地質構造に適應し,東西方向は地形の一般的な傾き(基準となる富士川の谷への傾き)に対して従った(必従した)ためであろう。これに対し,天子山地では,このような傾向は認められない。赤石山地に比べて,低次の谷の発達が悪いことがやや目につくといふのである。

富士川本流沿いの水系が山地の水系と異なるのは,狭くても,谷底平野が多少とも分布することを示す。本流と連続しない水流があるのは,図上で追跡できないため,あるいは谷線は山地斜面,段丘崖などに限って図化され得るためである。

谷密度は富士川本流沿いを除けば,概して大きく,特に顕著な地域差を示さない。しかし,天子山地は,低次の谷の発達がやや悪いため,谷密度は20前後を示すことが多く,40以上のメッシュはない。これに対して,赤石山地では,40以上の高谷密度メッシュが点在し,30以上のメッシュはかなり広範囲をカバーする。

(平川一臣, 吉村 稔)

## VI 土地利用現況図

図幅の大半は林地であり、樹相は概ね標高150m～900m程度が人工の針葉樹林であるスギやヒノキ、1,000m付近ではクリ、1,200m以上ではブナ等が群生している。南部図幅から富士宮図幅へ富士川が流れ、この富士川とその支流沿いの僅かな平地部分に国道52号やJR身延線が走る。また、この平地部分に街区や行政機関、水田等が集中している。桑園や茶畑等は平地部分より山地までの河岸段丘面の特に南面側に点在している。

山林部分は、大半が民有林であり、県有林等の官有林は、安倍峠、十枚山等の南アルプス支脈の内、比較的標高の高い部分に限られている。

# 資 料

## コンピューター・マッピングについて

山梨県では、土地分類基本調査成果の活用を図るため、昭和61年度から地形、表層地質、土壌の3図幅の印刷についてコンピューター・マッピング方式を採用し、土地利用現況図についても、印刷業者の協力により、地図情報をコンピューターに入力しております。

“コンピューター・マッピング方式”とは、「コンピューターに地図情報を入力し、入力したデータを機械が解読し、これに基づいて印刷する」という方式です。

この方式により、複数の図面を重ね合わせた複合図面の作成や各凡例ごとの面積測定が可能になり、各種災害の危険地域を予測したり、利用目的ごとの開発の可能性を判断するなど、行政機関が計画を立案・検討する際に欠かせない重要な資料となります。

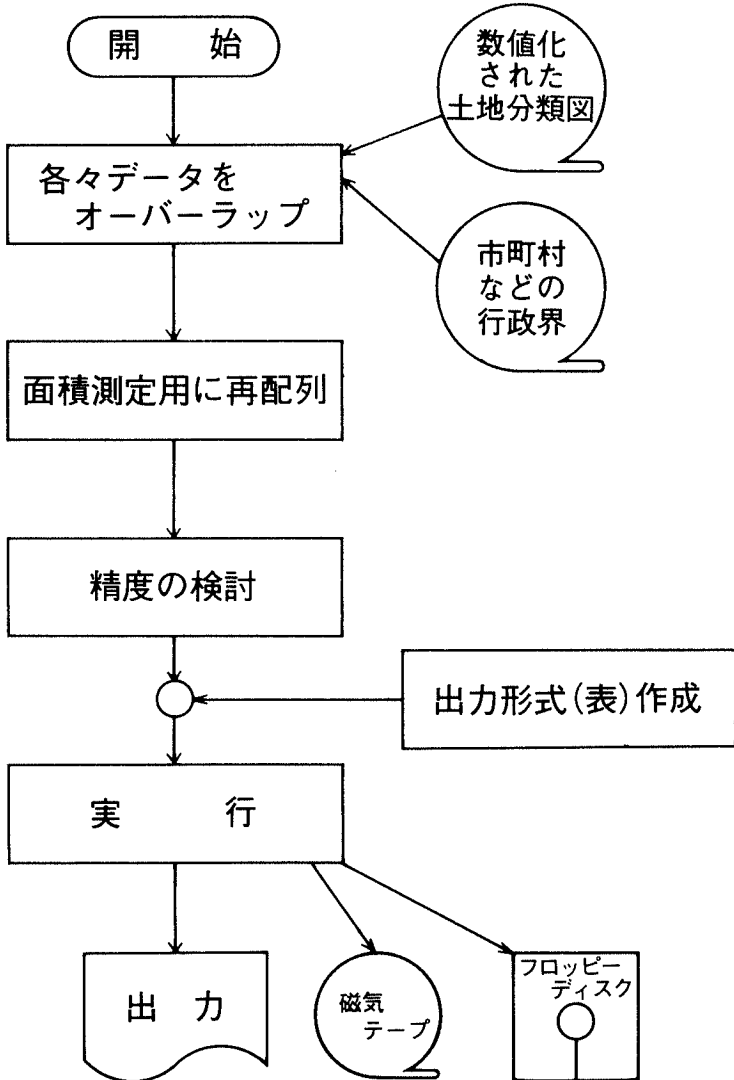
本年度のコンピューター・マッピング方式の成果として、地形分類図と土地利用現況図の面積測定の結果を掲載いたしました。

なお、コンピューター・マッピング方式の採用により、この土地分類基本調査の成果がさらに多くの場で活用されることを希望しております。



## 土地分類基本調査における面積測定について

数値化された地図情報の利活用の1つとして面積測定が上げられます。今回の面積測定は、下記の流れによって作業を実施いたしました。



## 作成できる面積測定表の例

- ① 1 図葉中での各凡例の面積測定  
    〈例 1〉
- ② 1 図葉中での、市町村を単位とした各凡例の面積測定  
    〈例 2〉, 〈例 3〉, 〈例 4〉, 〈例 5〉

※入力されたデータ（面積測定成果）は、磁気テープ、フロッピーディスク等での保管が可能になり、従来の地図原図に比べて場所を取りません。また、成果の維持管理が容易であり、統一化した精度の図面を常時短時間で印刷することができます。

〔例-1〕

## 市町村面積測定結果

単位：km<sup>2</sup>

市町村名	面積
早川町	16.79
身延町	40.00
南部町	97.01
富沢町	87.73
合計	241.53

〔例-2〕

## 低地、凸型斜面、凹型斜面の面積測定結果

単位：ha

市町村名	低地 3°～1/2°	山頂及山稜 平坦面凸	顕著な凹型 斜面
早川町	0.0	63.1	5.5
身延町	28.9	41.4	3.5
南部町	135.8	170.1	14.4
富沢町	105.4	134.8	28.8
合計	270.1	409.4	52.2

〔例-3〕

地形分類面積測定結果（市町村別）

単位：ha

凡 例 名	早 川 町	身 延 町	南 部 町	富 沢 町	合 計
山地斜面 >40°	315.3	512.6	622.3	338.1	1788.3
山地斜面 >30°~40°	1151.0	2512.6	5840.3	4856.9	14360.8
山地斜面 >15°~30°	193.4	684.2	2034.3	2687.8	5599.7
山地斜面 <15°	8.8	17.3	137.7	184.6	348.4
新期土石流地形	1.2	31.9	65.2	28.6	126.9
古期土石流扇状地及堆積	5.3	9.7	68.3	44.3	127.6
砂 礫 台 地	3.7	8.6	143.6	77.0	232.9
谷 底 平 野	0.0	48.1	302.8	336.5	687.4
旧中州ポイントパー	0.0	0.0	11.9	0.0	11.9
現 河 床	0.0	148.2	346.5	179.1	673.8
道 路	0.0	27.2	127.8	40.1	195.1
河 川	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
合 計	1678.7	4000.4	9700.7	8773.0	24152.8

[例-4]

土地利用現況図面積測定結果 (市町村別)

単位：ha

凡例名	早川町	身延町	南部町	富沢町	合計
田	0.0	40.4	329.2	272.9	642.5
普通畑	0.0	115.9	322.8	430.6	869.3
果樹園	0.0	0.0	3.0	1.8	4.8
桑畑	0.0	0.0	3.5	1.6	5.1
人口針葉樹林	90.8	1046.9	4647.4	4828.7	10613.8
人口広葉樹林	0.4	0.2	1.9	40.8	43.3
天然針葉樹林	417.0	48.1	97.4	126.1	688.6
天然広葉樹林	791.7	2296.0	2661.7	2103.7	7853.1
竹林	0.0	3.5	16.7	46.3	66.5
未立木地	277.7	161.2	375.9	28.1	842.9
原野	101.1	240.7	957.1	746.7	2045.6
裸地・荒地	0.0	0.5	90.6	24.2	115.3
市街地・村落	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
工場	0.0	28.0	133.0	38.1	199.1
河川・湖	0.0	19.0	60.5	83.4	162.9
道路	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
合計	1678.7	4000.4	9700.7	8773.0	24152.8

[例-5]

単位：ha

凡 例 名	早 川 町	身 延 町	南 部 町	富 沢 町	合 計
県 有 林	1395.7	960.5	769.3	617.7	3743.2
水源かん養保安林	1394.8	794.1	1980.5	1755.9	5925.3
土砂流出防備保安林	0.0	11.2	33.1	5.5	49.8
自然保存地区	0.0	0.0	0.4	77.4	77.8

1990年3月 印刷発行

土地分類基本調査

## 南部・富士宮・清水

編集発行 山梨県農務部農村整備課  
山梨県甲府市丸の内1-6-1

印刷 内外地図株式会社  
東京都千代田区神田小川町3-22